

■十二指腸粘膜にリンパ濾胞増生を伴ったランブル鞭毛虫症

症例：30歳男性，イラン人。上腹部不快感と軽度の下痢を訴えて来院。上部内視鏡検査で，十二指腸の第二部，第三部粘膜に多発性小隆起を認めたため，生検が行われた。胆石の合併はない。組織学的に，隆起に一致したリンパ濾胞形成が確認された。周囲の粘膜固有層および上皮細胞間にも小リンパ球浸潤がめだつ(図10a)。よく観察すると，絨毛表面に沿って，卵形～三角形の好酸性小体が分布し，ランブル鞭毛虫症と病理診断された(図10b)。免疫染色でリンパ球反応を検索すると，CD3陽性T細胞が粘膜上皮細胞間に著し

く増加し，特殊型胃炎である“lymphocytic gastritis”類似の所見を呈していた(図11a)。また，リンパ濾胞に接する部位では，CD79a陽性のB細胞が円柱上皮間に侵入し，虫垂粘膜類似の lymphoepithelial lesion を形成していた(図11b)。これらは，ランブル鞭毛虫感染による局所免疫の活性化を示唆する形態所見とみなされる。なお，本例は外国人のため，胆汁細胞診検査は行われなかった。

教訓：リンパ濾胞形成のめだつ十二指腸粘膜生検に遭遇したときには，ランブル鞭毛虫症の可能性を考えて，絨毛表面を高倍率で観察したい。

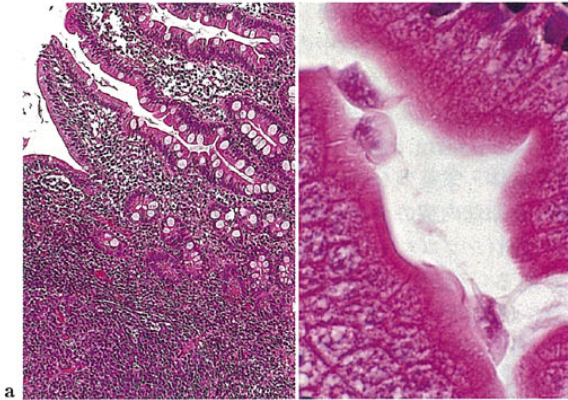


図10 十二指腸第二部の粘膜小隆起よりの生検像(HE染色) 胚中心を伴うリンパ濾胞形成とびまん性の粘膜内リンパ球浸潤を認める。絨毛に沿って，ランブル鞭毛虫感染が確認される。虫体には核が観察できる。

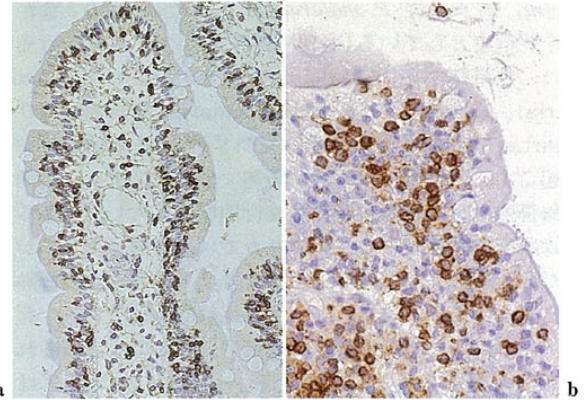


図11 ランブル鞭毛虫感染に対する十二指腸粘膜の免疫反応(免疫染色，a：CD3陽性T細胞，b：CD79a陽性B細胞) 上皮細胞間Tリンパ球の著しい増加が特徴的である(a)，リンパ濾胞に接する上皮細胞間にはB細胞が侵入し，虫垂に類似する lymphoepithelial lesion が形成されている(b)。